

「社会科教育における思考力・判断力・表現力の評価方法の開発に」 —教育現場の実態把握と論理学、分析哲学、社会学、認知心理学の研究成果を組み込んで—

1. 調査研究の目的・概要

(1) 調査研究の目的

本研究は、社会科における「思考・判断」は明確に評価されていないという実態に基づき、社会科における「思考・判断」を明確に評価する方法を開発することを目的としている。

(2) 調査研究の概要

①社会科授業における「思考」を明らかにする。

社会科授業における「思考」を明らかにするために、論理学、分析哲学、社会学、認知心理学の先行研究の成果を組み込む。

②明らかになった「思考」の評価方法を開発する。

「思考」場面における「表現」の重要性から、子供に「思考」過程を「表現」させることによる、授業場面における評価方法を開発する。

③明らかになった「思考」過程に基づいた、評価問題を開発する。

【研究期間：平成24～25年度、研究代表者：米田豊（兵庫教育大学大学院教授）】

2. 研究成果の概要

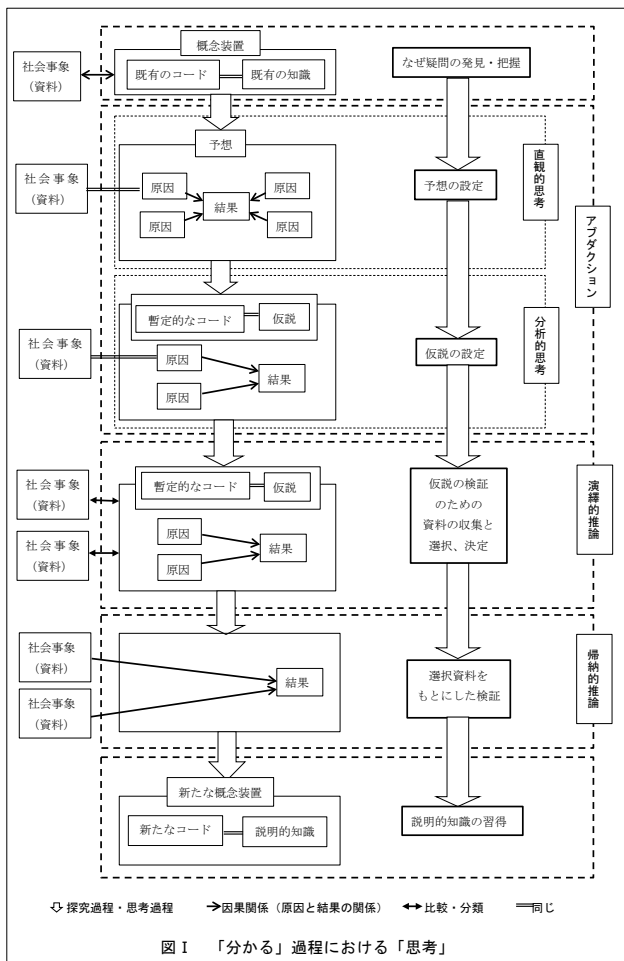
(1) 社会科における「思考」とは

①社会科の「分かる」過程における「思考」の構造

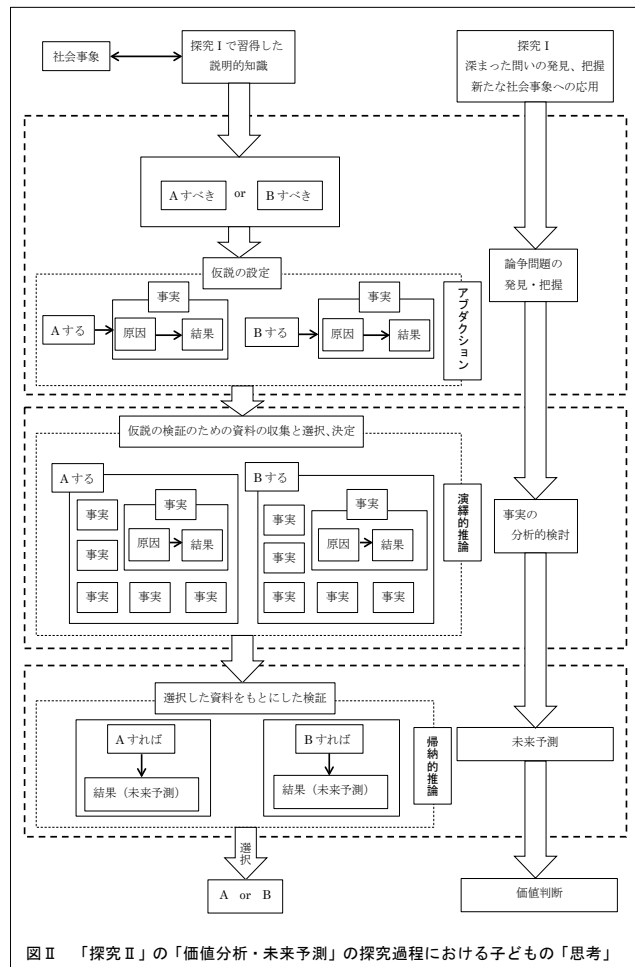
社会科の「分かる」過程における「思考」は、場面で断片的に働く行為ではなく、過程として常に働く行為であるということが明らかとなった。それは、探究において、アブダクションによって仮説が生成され、演繹的推論により仮説を説明する事例を選択し、帰納的推論によって選択した事例を検証する過程をたどることである。（次ページ図Ⅰ）

②社会科の「考える」過程（「価値判断・未来予測」）における「思考」の構造

社会科の「考える」過程における「思考」は、「論争問題の発見」「事実の分析的検討」「未来予測」「価値判断」の過程を経ていることが明らかとなった。「分かる」過程で習得した知識を基に、社会事象について考えることで、論争問題が発見され、把握される。その後、論争問題を探究するために必要な事実を分析する。事実が科学的な根拠を持っている必要がある。つまり、因果関係を分析することになる。そして、価値判断する判断軸に沿って、事実の分析を積み重ねる。その事実を基に、未来予測が導き出される。最終的には、導き出された価値を選択する。（次ページ図Ⅱ）



図Ⅰ 「分かる」過程における「思考」



図Ⅱ 「探究Ⅱ」の「価値分析・未来予測」の探究過程における子どもの「思考」

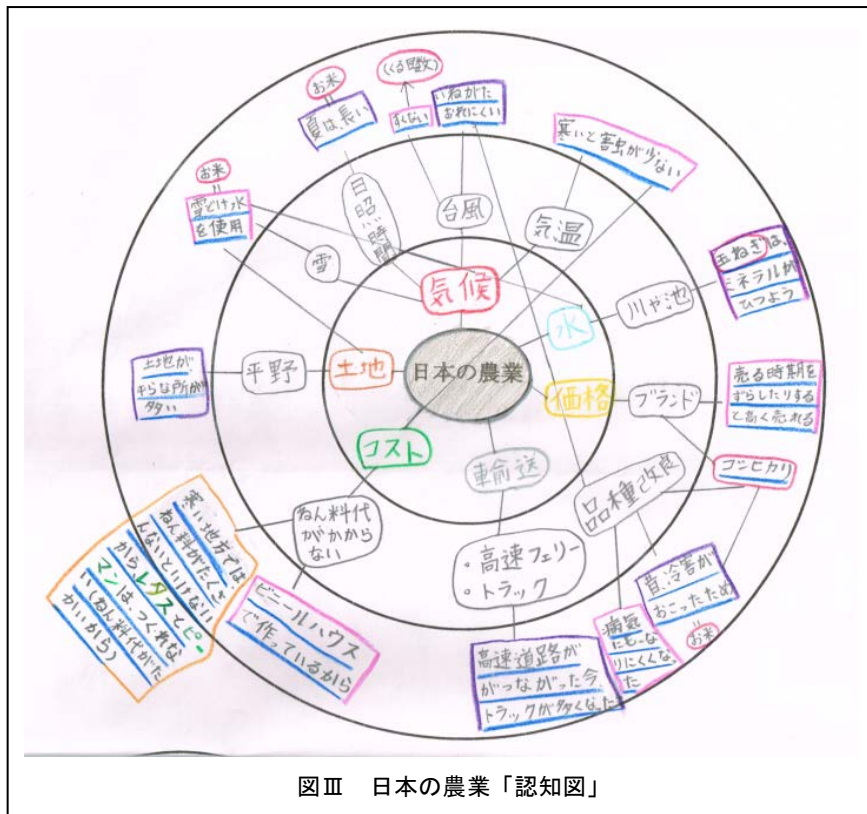
(2) 社会科の「思考」の構造に基づいた授業開発と「思考」の評価

①授業における評価

「わたしたちの食生活と食料生産」を事例に「認知図」を組み込んだ授業を開発した。概念を「認知図」として図式化することにより、それまでに形成された概念を見ることが可能となる。それを積み重ねていくことで、記述的な知識から説明的な知識へと知識が成長し、最終的には日本の農業についての概念的知識を習得することができた。子供が、どのように概念形成に至ったのかを、図から見ることができる。子供は、様々な要素を組み合わせ、「認知図」を形成している。つまり、「認知図」を組み込むことで概念の形成過程を見ることが可能となり、「思考」の評価が可能になる。(次ページ図Ⅲ)

②評価問題における評価

子供が資料をどのように活用して問題解決に至ったのか、「思考」のプロセスを問う問題を評価問題に組み込むことで、評価問題で「思考」を評価することができた。「思考」の方法を示すことで、教師は子供に資料をどのように活用させると良いか、どのような問いで問題を作成すると「思考」を評価することができる問題かが明らかとなった。また、授業改善、評価改善も可能となることが明らかとなった。



(3) 研究成果

社会科における「思考」の評価は、教育現場において明確になされているとは言えない。それにもかかわらず、社会科における「思考」の重要性は増している。このままでは、教育現場の混乱は解決しないばかりか、子供たちの社会認識形成と市民的資質の育成もままならない。この点を解決するために本研究に取り組んできた。

2年間の研究による大きな成果は2点ある。1点目は、社会科における「思考」が明らかになったことである。2点目は、社会科における「思考」の評価方法として、授業を通しての評価と、評価問題による評価を提案できたことである。

(4) 研究成果の発信

本研究の成果を発信するために、第25回社会系教科教育学会においてラウンドテーブルを行った。ラウンドテーブルのため、配布資料を100部用意した。しかし、資料が不足するほどの参加者数であった。研究者や実践家が、「思考」の評価に関心が高いことを示している。

全国各地から社会科教育の研究者と実践者が集まってくる場でのラウンドテーブルであった。本プロジェクト研究の成果を周知するためには、相応の場であった。研究協力者も、これまでの研究成果に基づき、意見を発表した。何よりも、本研究に携わった研究協力者だけでなく、教育現場の実践家から数多く意見を出されたことにより、本研究の研究成果の周知につながっていると考えている。